

ワクチン接種率0・3%の国で<中>コロナより恐れられる、あの生き物

2022年3月6日平野光芳・ヨハネスブルク支局長 毎日新聞



キンシャサの住宅街に放置されたごみ。衛生状態が良いとは言えない＝コンゴ民主共和国で2022年1月30日、平野光芳撮影

コンゴ民主共和国は新型コロナウイルスのワクチン接種率が世界最低水準の国の一つだ。なぜ接種が進まないのかを探ろうと、私は首都キンシャサで取材を始めた。見えてきたのは、先進国とは異なるコロナへの受け止め方だった。

「マラリアとどう区別するのか？」

キンシャサ郊外にあるミテンディ地区はすり鉢状に広がる山の斜面を切り開いてできた貧困地区だ。放置されたごみが踏み固められた路地が伸びている。地面を掘っただけの「トイレ」から汚物が漏れて斜面を流れ落ち、あやうく踏んでしまうところだった。

自宅前でちょうど体を拭いていた飲食店従業員の女性、ヌドナ・ビビシさん（43）に話を聞いた。ビビシさんの新型コロナウイルスに対する考えは、地元では典型的なものだ。

——新型コロナウイルスについてどう思いますか。

この地区にはコロナは存在していません。コロナにかかった人を見たことも聞いたこともなく、どんな症状なのかも知りません。

——普段、マスクは着けますか。

家や近所ではしませんが、繁華街や学校、病院に行く時は着けます。保健省がそう求めていますから。

——ロックダウン（都市封鎖）による経済的な影響はどうですか。

経済が破壊されました。仕事を失う人も出ています。私の働く酒場も（規制で）午後8時までしか営業ができなくなり、売り上げが落ちました。

——コロナワクチンについて聞いたことはありますか。

あります。ただ、この地区でコロナにかかったことのある人がいないので、打ちたいとは思いません。ここはコロナと関係ありません。接種したという人も知りません。私はコロナについてよく知らないのですが、どんな症状があるのですか？

——頭痛、発熱、せきなどです。死に至ることもあります。

じゃあマラリアと同じね。マラリアとコロナの違いは何ですか。どうすれば区別が付くの？

——病院で検査をすれば分かります。鼻から綿棒を入れて調べます。

10歳以下の子供もコロナにかかるの？

——かかることはかかりますが、重症化することはまれです。ほとんど影響はありません。

そうですか。マラリアは0歳児でもかかりますよ。

蚊の一種であるハマダラカが媒介するマラリアは、コンゴの国民病だ。毎年3人に1人が感染し、推計で4万5000人前後が亡くなっている。地元の人は一生涯に何度もかかるが、特に免疫が低い乳幼児が重症化しやすく、死者の半数以上は5歳未満。アフリカを中心に他の途上国でも感染者は絶えない。

予防や治療のキャンペーンが進み各地で死者は減少傾向にあるが、それでも2019年には世界で約41万人が死亡した。昨年ようやく世界保健機関（WHO）が初のワクチン（子供向け）を承認した。

子供がめったに重症化しないマラリアみたいな病気でそんなに騒ぐ必要があるのか。ピビンさんはそう言わんばかりのげんな様子で私を見た。質問している私のほうがだんだん気まづくなってきた。

コロナワクチン「聞いたことがない」

道路脇で、売るための魚をさばいていたクロディネ・マルテラさん（52）にも話を聞いたが、同様の反応だった。

——コロナについてどう思いますか。

話には聞くが、かかったという人を見たことがありません。家族にも知人にも。繁華街に行くときは感染する恐れがあるのでマスクはします。



「コロナをどう恐れればいいのか」と話すクロディネ・マルテラさん (52) =コンゴ民主共和国の首都キンシャサで2022年1月30日、平野光芳撮影

——政府は深刻な問題だと言っています。

周りでだれもかかっているのにどう恐れればいいのか。

——コロナのワクチンについて聞いたことがありますか。

ありません。

——経済への影響はどうですか。

コロナの前から経済は悪かったです。政治家のせいです。

政府幹部から専門家、庶民まで現地で話を聞いて共通していると感じたのは、コロナに対する危機感が日本や諸外国と比べて低いということだ。人口 9000 万人で累計のコロナ感染確認者は 8 万 6000 人、死者は 1300 人とどまる。もちろん実際の死者は何倍、何十倍にも上る可能性があるが、医療・検査態勢が不十分なため、本当の感染者数や死者数は誰にも分からない。だから多くの人にとって現実感がない。「先進国の人がかかる病気」「キンシャサ中心部のお金持ちがかかる病気」と言う人が多かった。

マラリアの恐怖

人々がコロナより恐れるマラリアの実態を知りたいと、キンシャサ中心部から 15 キロほどの公立マシナ病院を訪れた。エアコンのない小児救急治療室で、5 人の幼児が黒い簡易ベッドにぐったりと横たわっていた。マラリアが重症化して入院した子供たちだ。

チバンゴ・カンコちゃんは 1 歳 8 カ月の男児。大きく見開いた目はうつろで、点滴の管が体につながれている。ほぼ 1 秒間隔でおなかを大きく膨らませ、その度に小さな赤いシャツが上下に波打つ。必死に呼吸をする姿は痛々しくてとても見ていられなかった。



マラリアが重症化して入院したチバンゴ・カンコちゃん（左）。母ヌダラムバ・ルイズさん（右手前）が看病していた=キンシャサで2022年2月3日、平野光芳撮影

付き添いで看病している母親のヌダラムバ・ルイズさん（22）によると1週間ほど前から発熱の症状があったが、当初は病院には行かず、教会でお祈りをして治癒を願った。ところが容体が悪化したため前日に病院に駆け込み、生まれて初めてマラリアと診断された。「息子がいつ蚊に刺されたのか分かりません。夜寝る時にはいつも蚊帳を張っていますが、少し壊れていました」

年老いた親がコロナで死ぬのと、幼い我が子がマラリアで死ぬのはどちらが恐ろしいだろうか。そんなことは比べようがないかもしれない。病で大切な家族を失うのは、大きな悲しみだ。ただ、親が長生きをした末に息を引き取れば、もしかしたら「天寿を全うした」と無理にでも自分を納得させることができるかもしれない。だが、もしも我が子が幼くしてマラリアに命を奪われたら、一生悔やんでも悔やみきれないだろう。

衛生状態が良くても人や空気を介して感染が広がり、高齢者が多く犠牲になる新型コロナは、特に先進国で大きな脅威に映る。それに対してマラリアは衛生状態の悪い場所で子供が犠牲になる途上国の病気だ。同じ病気でも地域によって受け止め方は大きく異なる。コンゴの人々にとっては、マラリアの怖さに比べれば、コロナはさほど気にならない病なのかもしれない。

現地の専門家の見方は

コンゴで会った感染症の専門家たちも「コロナ対策で頭がいっぱい」という様子ではな

かった。コンゴの感染症研究の拠点施設、国立生物医学研究所（INRB）のジャンジャック・ムエンベ所長（79）は1970年代からエボラ出血熱の研究にも携わり、同国を代表する感染症学者だ。ムエンベ氏がコロナワクチンの接種を受ける場面の写真は、コンゴの接種キャンペーンの看板で使われるほどの有名人でもある。



国立生物医学研究所（INRB）のジャンジャック・ムエンベ所長＝コンゴ民主共和国の首都キンシャサで2022年2月2日、平野光芳撮影

INRBの会議室で取材に応じてくれたムエンベ氏に対し、私は「コンゴでは政府が発表する公式統計よりも、もっと多くの方がコロナで亡くなっているのではないのでしょうか」と質問をぶつけた。ところがムエンベ氏の答えは「政府の統計は現実を反映している」という見方だった。「墓地で埋葬されている人が急増しているという話もない。コンゴの人口（の平均年齢）は若く、コロナでは重症化しにくい。コンゴにおいてコロナ禍は猛烈なものではない」

ムエンベ氏はもちろん「ワクチンは重症化や死亡を防ぐ上で非常に重要だ」と強調し、「ソーシャルメディア上で（ワクチンは危険だという）フェイクニュースが広がって多くの方が接種を拒否している」と現状に懸念を示した。一方で「コロナで死ぬのを見た人はほとんどいないが、マラリアでは多くの方が亡くなっている。『なぜマラリアに対してコロナのような（大規模な）キャンペーンを行わないのか』と疑問に思っている人もいる」とも指摘した。

この国はコロナだけでなく、マラリアやエボラ出血熱といった感染症と格闘している。エイズの感染が世界で初めて広がった場所は1920年代のキンシャサだったという説もある。他にも日本では聞いたこともないような、貧困や不衛生と密接に結びついた伝染病が数多く存在する。コロナ対策は重要だが、先進国の基準を当てはめてそれを最優先課題とすることに多くの国民が少し戸惑っているのではないだろうか。

マラリアはコロナと違い、「蚊」という目に見える敵がいる。会議室でムエンベ氏が来るのを待っている間、目の前に蚊が1匹飛んでいるのが見えた。椅子から立ち上がって何度か両手ではたこうとしたが、あと少しの所で逃してしまった。インタビュー中は話に集中していて分からなかったが、その後、右足のくるぶしのあたりを刺されているのに気付いた。

刺した蚊はハマダラカではないかもしれない。「コロナの取材に来てマラリアにかかったらどうしようか」。私は取材に同行してくれたガイドに冗談めかして言った。でも本音を言えば、このかゆみは恐怖だった。かゆみが収まった後も、しばらくの間、私は不安を完全に拭い去ることができなかった。現地の人のがちもちが少しだけ、分かった気がした。



マラリアを警戒し、寝る時には蚊帳を欠かさないと女性＝コンゴ民主共和国の首都キンシャサで2022年1月30日、平野光芳撮影